

オペレッタ授業における学習者自身による自己評価 — 客観的視点を養う評価シートの作成 —

伊藤 智里, 青井 則子, 秋政 邦江, 尾崎 公彦

Self-Evaluation by Learners in the Class of Operetta — Making an Evaluation Sheet Which Cultivates an Objective View —

Chisato ITO, Noriko AOI, Kunie AKIMASA and Kimihiko OZAKI

キーワード：医療保育研究, 表現, 客観的視点, 評価シート

概 要

本研究は、オペレッタ授業を通して学生同士が学びと気づきを共有し、客観的に自らの作品発表を顧みる方法を模索することを目的とし、PPPチェックリストの様式を採用した自己評価シートを作成し、その内容について分析・考察した。自己評価するためのチェック項目を自分で作成することにより、学生が授業において感じていた思いや関心を浮き彫りにすることができた。また、教員がチェック項目を作成するためのカテゴリを提示したことで、学生は、授業の目的とねらい、達成目標を意識して確認することができた。他人に表現して観せる為には、創る側と観る側の2つの視点が必要であるが、観る視点を意識した指導をさらに強化することが今後の課題である。

1. 緒 言

本研究は、オペレッタ授業を通して学生同士が学びと気づきを共有し、客観的に自らの作品発表を顧みる方法を模索することを目的とする。前回筆者らは、オペレッタ作品の制作過程及び作品発表を通じた表現内容の学習方法について考察することを目的とした研究を行った。学生の感想に見られる学びと気づきについて18項目に分類した。そして、学生がオペレッタ制作を通して、他者との共通理解によって個人スケールを越えた集団での作品創りが可能であることなどを学ぶことができたことを明らかにした¹⁾。

作品を創作する上で最も重要な点は、伝えたいことの有無であると考え。まず伝えたいことがあるという点が創作の原点となる。そして、伝えたいことを具現化する際に選ぶ表現形態の違いにより、芸術の分野が分かれる。オペレッタは、身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現が一体となった総合表現である。伝えたいことを具現化するための手段が多様であり、そ

れらの統合と調和を図りながら作品を創作する。

また、他人に表現して観せる為には、創る側と観る側の2つの視点が必要である。「創る側の視点」とは、伝えたいことを明確にし、それをどう具現化するかということに重点をおく視点である。「観る側の視点」とは、伝えたいことが第三者にはどのように見え、どのように伝わるかということに重点を置く視点である。オペレッタを制作し発表することで、表現する意欲が高まり、達成感を味わうことができることは、前回の研究結果からも明らかであり、観せるということの重要性も確認できたと言える。

オペレッタは、想像力や表現力を養う活動として注目される。オペレッタの研究では、学生の表現力の向上と、人間関係力の向上を目的とした上で、オペレッタを体験することにより学生が得たものについて分析するものが多い。例えば宮本智子(2007)は、幼稚園でオペレッタを実施している幼稚園が多数あり、保育者自身が豊かな感性を持ち、その技術を身につける必要があるとし、オペレッタによって表現力やスキルの向上が見られたと述べている²⁾。これは「創る側の視点」での効果が証明されていることになり、前回の筆者らの研究結果と同様の結果である。小澤和恵(2008)もほぼ同様の結果を述べているが、それに加えて「表

(平成22年10月15日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

現内容の充実とともに表現欲求の高まりが感じられる記述が多くなった（もっと客観的な視点から動きを考えれば良かった、もっと感情を込めた表現をしたかったなど）」と述べている。そして、「このような体験的気付きは貴重であり、自己評価力の向上に繋がることである」としている³⁾。これは、「観る側の視点」を取り上げる今回の筆者らの考えと共通する部分である。

前回の研究結果では、学びと気づきとして、学生は「創る側の視点」で振り返ることは出来るが、「観る側の視点」についての気づきが薄いことが明らかになった。つまり、どう創るかについての反省をすることは出来るが、第三者が観る事に対する意識が薄く、観る側にどう受け取られたかについての洞察は出来ていない。筆者らは、第三者に向かって表現する場合、自己の表現意欲だけでなく、相手に何を伝えたいか、また、相手にどう伝わるかを意識する事が重要であると考え、観る側の視点の存在に学生が気付くためには、客観的に自分の作品を見る視点を養うことが必要である。その手段として、自己評価シートの作成を試みた。自己評価シートの作成を通して、協調性の重要さや表現力についての内容と共に、第三者の視点、演技や舞台についての内容を確認することができると推測する。

2. オペレッタ評価チェックシートの作成

本研究に取り入れたのは、トライポッド・デザイン社の作成したPPP (Product Performance Program) チェックリストの様式である⁴⁾。PPP チェックリストとは、ユニバーサルデザイン (以下UDとする) のプロダクト設計支援ツールで、ノースキャロライナ州立大学デザイン学部UDセンターによってまとめられたUD7原則⁵⁾を細分化し、具体化したものである。様式は、「チェック項目」「チェックのポイント」「コメント」から成り、それぞれの項目を点数化して評価し、レーダーチャートにすることで、気づきの度合いを視覚化することを可能にしている。PPP チェックリストは、客観性が高く、鎌田実ら (2002) の研究に見られるように、応用することで具体的な手法の提示や考えるべき点の整理を行うことに役立っている⁶⁾。そこで、客観性を重視できるPPP チェックリストの様式のみを、オペレッタの自己評価に取り入れることを試みた。

今回は、チェック項目を考える作業から学生に提示した。ねらいは、チェック項目を作ることで潜在的に持って活動していた自己課題を明確にすることである。チェック項目に挙がる内容は、自ずと自分で体験

したり気付いたりした範囲のものになる。その内容を文章化することで、自己評価が明確にできると考えた。

チェック項目は10項目とし、各点数は5点満点とした。チェック項目は、単語や短い言葉で記入し、チェックのポイントに具体的なチェックポイントを短文で記入した。コメントはチェック項目に対して自由に記述するようにした。

3. 評価チェックシート作成方法について

(1) 調査対象

K医療短期大学で医療保育を学ぶ3年生68名のうち、反省会出席者66名 (97.1%) を調査対象とした。オペレッタチームはA～Eの5チームであり、各チームは12～14名で構成されている。演目は、Aチーム「雪の女王」、Bチーム「アラジン」、Cチーム「桃太郎」、Dチーム「月輝姫 (かぐやひめ)」、Eチーム「美女と野獣」である。それぞれ参考にした原作はあるが、上演時間と伝えたいテーマに合わせて物語を脚色・創作している。

(2) 方法

授業期間は、平成21年4月～7月までの15回 (1回180～270分) である。14回目で学内公開の発表会をし、最終回を反省会の時間とした。評価チェックシートを作成したのは、最終回の平成21年7月30日で、所要時間は約30分である。授業の目的及びねらいは、「言葉、音楽、造形、身体表現の分野を総合的に捉えて、創作活動に取り組むことにより、保育者に必要な感性、想像力、表現力、技能を養う。また、集団での創作活動を行うことにより、達成感や成功体験を積み、グループで活動することの困難や喜びを学び、子どもと共に表現を楽しむ豊かにできる保育者を育成することを目標とする。」であり、授業終了時の達成課題 (到達目標) は、「各グループそれぞれの役割を統合して創作した作品を舞台上で発表する。そして、子どもと共に楽しみ創りあげることの喜びを感じられる知識と経験を身につける。」である。

反省会では、まず全員で全チーム分の発表会の録画映像を鑑賞した。次に、チーム毎に話し合いながら評価チェックシート (以下「シート」とする) の「チェック項目」「チェックのポイント」を考えて記入した。項目を考えるに当たって、授業の目的・ねらいと達成課題をふまえたおおまかなカテゴリを教員側から提示した。記入済みの評価チェックシートの回収後、筆者らで全チームの「チェック項目」及び「チェックのポ

イント」を分類した。そして、「チェックのポイント」の内容に見られる「観る視点」及び「創る視点」を分類した。

筆者らが提示したカテゴリは、①「コミュニケーション」②「備品の使用」③「施設の使用」④「制作上の工夫」⑤「その他」の5つである。①は、前回の研究で学生の学びと気づきに多く挙げたものである。②③は、筆者らが授業を通して注意喚起してきた作業上必要な条件である。④は、想像力や技能を向上させる要素であり、授業の目的とねらいと関係が深いものである。①～③までは「創る視点」に属するものであり、④は「観る視点」に属するものである。⑤「その他」には、各チームの思いや問題であった部分などが反映されることを想定した。

4. 結 果

(1) チェック項目の内容について

各グループの「チェック項目」を「カテゴリ」別に内容によって分類した結果を表1に示した。「視点」欄は、「チェックのポイント」の記述をもとに「創る視点」と「観る視点」を分けたものである。視点の詳細は、表2に整理した。表1についてみると、「コミュニケーション」は、6つの項目に分かれた。表現が類似しているものもあるが、チェックのポイントの内容が微妙に異なるため、別のものとして分類した。「友達関係」、「協力」といった人間関係自体に関するもの以外に、「向上心」のように人間関係をもとにして目指した共通目標を項目にしているものが見られる。

「備品の使用」「施設の使用」は、それぞれ4つの項目にまとまった。備品に消耗品も含まれているのは、筆者らが各チーム共通で使用する一定の消耗品をそろえていた為である。教員が用意した素材を分け合って使用するため、学生は消耗品を備品と捉えている。消耗品の適切な使用と、備品の使用ルールについての2つの内容がチェック項目になっている。施設・備品に共通して、「使用時間」（時間厳守）や「片付け」という公共の場や公共物に対する基本的な使用マナーを再確認していることが分かる。

「制作上の工夫」は、「演出」が2チームが重なった以外、各チームともチェック項目が異なった。脚本、音楽、振付、造形の分野別に焦点を当てているものと、「世界観」や「リアリティ」のように総合的に捉えるものが見られる。

「その他」のチェック項目には、筆者らが想定した

表1 カテゴリ別 チェック項目

カテゴリ	チェック項目	数(個)	視点
コミュニケーション	協調	2	創・自, 創
	向上心	1	創・自
	友達	1	創
	協力	2	創
	仲良く	3	創, 創・自
	個々に意見を出す	1	創
備品の使用	材料・エコロジー	5	創
	使い方(備品)	1	創
	貸し出しルール	3	創
	片付け	1	創
施設の使用	他班と協力	3	創
	片付け	4	創
	使用時間	2	創
	使い方(ルール)	1	創
制作上の工夫	セット	1	創・観
	演技	1	観
	世界観	1	創
	努力	1	創
	細かいこだわり	1	創
	リアリティ	1	創・観
	演出	2	創・観
	脚本	1	創
	物の工夫	1	創・観
その他	担当	1	創
	時間	1	創
	本番	1	創
	演技	3	創・観, 観
	友情	1	創・自
	楽しさ	1	創・自
	作品をよくする努力	1	創
	助け合い	1	創
	総計	50	

ように、各チームで問題であったことや力を入れた点が明確に表れている。このカテゴリの項目を見ると、上記の4つのカテゴリのうち、「コミュニケーション」「制作上の工夫」に全て分類可能でもあるが、各チームが最も自己評価したいと思って出てきた内容であると考えられるため、「その他」として別に分類した。

(2) 観る視点と創る視点の意識について

「チェックのポイント」に記述された内容を基にチェック項目が「創る視点」「観る視点」のどちらが意識

表2 視点別のチェック項目分類

視点	記述数(個)
創る視点のみ	35
観る視点のみ	2
創る視点・観る視点	7
創る視点・自己内省	5
観る視点・自己内省	0
自己内省のみ	0
創る視点・観る視点・自己内省	1
総計	50

されているかを分類し、表2に示した。「チェック項目」は、単語で記入しているため、学生の評価したい内容は短文で記入する「チェックのポイント」に表れると考え、純粋に「チェックのポイント」のみを分類した。「チェック項目」で同じ言葉を使用しているも、「チェックのポイント」に記述された内容では、視点が相違するものもあった。2つの視点のどちらでもなく、自分の資質向上と感情に関する記述は「自己内省」と呼ぶ。「創る視点」のみから記述された内容が最も多く、全体の70%を占める。「観る視点」のみも2項目あり、全体の4%であった。「創る視点」と「観る視点」を合わせ持つ項目は7項目、「創る視点」と「自己内省」を合わせ持つ項目は5項目であった。「創る視点」の入っている項目は合わせて48項目、「観る視点」が入っている項目は合わせて10項目であり、「創る視点」と「観る視点」の割合は、約5:1であった。

5. 考 察

(1) カテゴリ別のチェック項目分類について

チェック項目を作成するためのカテゴリを提示したことで、筆者らが学生に学ばせたかった事について学生が再確認することができたと考えられる。例えば、公共のマナーについてなどは、保育現場でオペレッタ制作をする際に必要となるだけでなく、社会人の常識として学生に身につけて欲しい部分である。学生は、カテゴリを提示されたことで、授業での指導を振り返って項目を作成したことは明らかであるが、自分たちが意識したり問題視していたりした部分と異なるため、チェック項目に多様性がなかったとも言える。

チェック項目の記述表現の多様性から、各チームの思いを読み取ることができると考えるが、カテゴリの中で最もチェック項目の表現が多様であったのは「制作上の工夫」であった。オペレッタは総合表現であり、

創作した作品について各分野それぞれの自己評価を思い描いたはずであるが、「制作上の工夫」のチェック項目は2項目であったため、チームごとに一番思い入れのある視点でのチェック項目が書かれている。そして、なお表現に余るものが「その他」のカテゴリに移されていると推測する。「制作上の工夫」において、各チームで「チェック項目」が異なった理由は、各チームの作品の特徴がみられる部分であるためだと考えられる。例えば、Aチームは、暖色系に着色した背景1枚を8場面全てに使用した。他の舞台道具で花畑や家の中、城内などの各場面を表現する必要があり、道具の制作には大変力を注いだため、チェック項目には「セット」が挙げられている。一方、Dチームは、演目は「かぐや姫」であり、登場人物は一般的な昔話の人物名であるが、物語は、完全に創作であったため、チェック項目には「脚本」が挙げられている。

また、カテゴリの中でもっともチェックのポイントの記述が多かったのは、「コミュニケーション」の部分である。前回の研究や先行研究でもコミュニケーションに関する学びについては多く出てくるので、妥当な結果であると言える。コミュニケーションは、共同作業を行う上で不可欠であると同時に、最も問題になる部分である。学生は、ここをどのように克服したかが、評価すべき大きな出来事であると考えていることが推測できる。

カテゴリ及びチェック項目以外に注目すべき点として、「時間を守る」「相談」「話し合い」という言葉が、複数のチェック項目の具体的記述に出てくることが挙げられる。例えば「時間」であれば、集合時間、返却時間、使用時間などである。これらの言葉は、共同制作を行うにあたり、学生たちの中で問題になった部分を最も表していると考えられる。学生が時間を守り、グループの内外で相談し、話し合うことの重要性を感じていると同時に、行動に起こすことの難しさを感じていることがうかがえる。

(2) 観る視点と創る視点の意識について

筆者らが制作途中で助言・指導する際は「観る視点」からが中心である。「創る視点」から制作物や選択した音楽等に関しても主に相談・助言の形で指導を行うが、実際に学生が創った物に関して、観客の視点から助言を行う比重が大きい。学生は、教員の助言をふまえて、どうしたら伝わるのかについて、「創る視点」と「観る視点」を行き来しながら考え、制作をする。今回の結果では、観る側の視点の意識が比較的低いこと

が明らかになった。学生は、実際に創る側であるため、「創る視点」が多くなるのは必然である。だが、「観る視点」が極端に少ないということは、自己表現を自己満足の段階で終わらせてしまう危険性がある。創る当事者である学生に対し、教員は「観る視点」を意識して指導しているが、結果では学生への「観る視点」に関する部分についての伝達度が低いことが分かった。一つの原因として、総合表現における表現の統合の困難さが挙げられる。オペレッタは、伝えるための手段が音楽・身体表現・造形表現・言語表現と多様である。そのため、全ての表現手段に気を配り、意識して統合するという作業が必要となるが、その分の作業量は増え、作業時間と学生の意識に限界があったと推測する。また、創りたいものと伝えたいことに差がある場合や、伝えたい内容への意識より、自らが物語を楽しむことに集中している可能性も指摘できる。例えば、Bチームの演目は「アラジン」であるが、参考にした中にディズニーの映画があり、華やかなイメージで歌ったり踊ったりしたいという思いが表れている。Eチームも同様にディズニー映画を参考に制作を始めたが、テーマが表現できないことに悩み、途中で脚本を作り直したため、造形物制作や音楽の収集、振付や舞台練習などの時間が不足した。物語を写すのではなく、取り入れて自分たちの表現として演じることの必要性を理解することで、「観る視点」が生まれると考える。例示した2チームは、途中から世界観と伝わることを意識して練習を行ったため、「観る視点」がチェックのポイントに比較的多く含まれている。この問題を克服する為には、じっくりと作品やチームの学生と向き合う時間が必要であると考えられる。

(3) 評価シートを作成することで育まれる客観的視点について

評価シートについての学生の感想より、評価シートを各チームで作成することで、話し合う過程において、個人では気付かなかった部分や、共感する思いを確認することができたことが分かる。感想には例えば、「チェック項目に分けて振り返ると、いろいろなことに気をつけていたのだと実感しました」と記述されているものもある。これらの感想より、学生自身が、客観的に自分を見ることについて意識することができたことが示されており、客観的視点を育む一手段として評価シートは有効であると言える。評価シートをチェック項目から作成するという事は、冷静に今までの自分たちの行動を振り返る作業が必要であり、与えられ

たりリストをチェックするよりも詳細に振り返りを行うことになる。また、個人のことでなく、チーム内で共通した意見として記述するため、主観的視点からの意見を出し合って、客観的な視点を持って決定していくことになる。このように、同じ時間と苦労を共有した他人と自分との意見の相違や類似を経験することは、客観的な視点を育むことになると思う。

6. 今後の課題

オペレッタは、総合表現であるとともに、保育者に必要な能力を養うために有効である。保育者は表現者でもあり、保育者がより豊かな表現力や想像力を養うことは、子どもへの保育に大きな影響を与えると考えられる。医療保育は、全ての子どもに保育を行うことを命題としており、一人ひとりに合った保育を行うためには、子どもの姿を的確にとらえ、保育の目的と内容を適切に用意する柔軟性と発想力が必要である。オペレッタを行うことは、これらを身につける良い機会であると言える。また、客観的に自己の活動を振り返る能力や方法を身につけることは、将来保育をするに当たって、子どもに対する保育の方法を冷静に考えることができる能力を持つことを意味する。オペレッタの実践を客観的に振り返ることは、将来、保育実践の振り返りと向上に役立つ経験になると推測できる。

今回、評価シートを作成したことで、人間関係力や問題解決力などに関しての学生の意識の高さは確認できた。そして、総合表現に関して、より良い作品を創るため、よりしっかりと観る視点を意識できるようにするための工夫が不足していることも判明した。そして、グループで考えてシートのチェック項目を作成することで、個人では気付かなかった課題を明確にすることができた点で、客観的な視点の持ち方を学習できたと考えられる。

また、カテゴリを提示することは、学生の自由な内省を規制するため、学生に内在する課題が全ては出ていない可能性がある。これらのことをふまえ、この自己評価シートを使用することで可視化できる内容について、より効果的になるように工夫することを今後の課題とする。

7. 引用文献

- 1) 秋政邦江, 尾崎公彦, 青井則子, 伊藤智里: 医療保育科におけるオペレッタ授業の実践報告, 川崎医療短期大学紀要 28: 59-63, 2008.

- 2) 宮本智子：保育所養成校におけるオペレッタ授業の効果－表現力の観点から－，国際学院埼玉短期大学研究紀要 28：19－27，2007.
- 3) 小澤和恵：表現力と人間性を高める総合的表現活動の実践－オペレッタ上演から何を学ぶか－，埼玉純真短期大学研究論文集 1：39－45，2008.
- 4) 中川 聰：ユニバーサルデザインの教科書（増補改訂版）：日経 BP 社，pp. 14－16，144－145，196－201，2005.
- 5) 中川 聰：解説ユニバーサル・デザイン・ソリューション，日本機械学会誌105(1002)：41－43，2002.
- 6) 鎌田 実，楠本文朗，曾野明久：ユニバーサルデザインのタクシーに関する研究，日本機械学会第11回交通・物流部門大会講演論文集：315－318，2002.